長崎市立滑石小学校　校長室だより　Ｎｏ87

3月

今日の一言

６．３．７　校長　渕上　卓也

自分たちにできること

「能登半島地震」に対する募金活動においては、ご協力ありがとうございました。たくさんの募金が集まり、日本赤十字社を通じて被災地に届けられることとなりました。

「募金活動をしましょう。」と言い出したのは、滑石っ子たちです。被災地の状況をニュースで見て、「自分たちにできることは・・・」と行動に移してくれたのです。この思いが、少しでも被災地の皆さんに届くことを願っています。

被災地の学校も大きな被害を受け、高校の教室を間借りしたり、集団疎開で学校を続けたりしている地域がまだあるようです。一刻も早く学校に子どもたちの元気な声と笑顔が戻ることを祈るばかりです。

また、３月１１日は「東日本大震災」から１３年目を迎えます。こちらも、心に留めておかなければなりません。１３年前のその日、下校指導に出かけて職員室に戻ると、テレビには津波の襲来を受ける町の様子が映し出されていました。一瞬にして我々の生活を奪ってしまう災害の恐ろしさを目の当たりにして、言葉が出ませんでした。

あれから１３年、今でも生活再建へ向け努力を続けられている方々がたくさんいらっしゃると思います。「自分たちにできることは・・・」は、「忘れないこと」です。もうこの子たちが生まれてくる前の出来事ですからね。

毎年この時期に紹介している震災直後の「卒業式　答辞文」を裏面に掲載しています。お子さんと一緒にご一読いただきたいと思います。「忘れない」ために。

＜今日の一句＞
みなさんの
思いは届く
被災地へ　　卓也

「答辞」

今日は未曾有の大震災の傷も癒えないさなか、私たちのために卒業式を挙行して頂き有難うございます。

ちょうど 10 日前の３月 12 日、春を思わせる暖かな日でした。私たちは、そのキラキラ光る日差しの中を希望に胸を膨らませ、通いなれたこの学舎を５７名揃って巣立つはずでした。前日の 11 日、一足早く渡された思い出の詰まったアルバムを開き、10 数時間後の卒業式に思いをはせた友もいたことでしょう。「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こるとも知らず……。

階上中学といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。しかし自然の猛威の前には人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切な物を容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というにはむご過ぎるものでした。辛くて、悔しくてたまりません。

時計の針は 14 時 46 分を指したままです。でも時は確実に流れています。生かされた者として顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く正しくたくましく生きて行かなければなりません。命の重さを知るには、大き過ぎる代償でした。

しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。私たちは今、それぞれの新しい人生の一歩を踏み出します。どこにいても何をしていようとも、この地で仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます。

後輩の皆さん、階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が、如何に貴重なものかを考え、いとおしんで過ごしてください。

先生方、親身のご指導有難うございました。先生方が如何に私たちを思って下さっていたか、今になって良く分かります。

地域の皆さん、これまで様々なご支援を頂き有難うございました。これからも宜しくお願いいたします。

お父さん、お母さん、家族の皆さん、これから私たちが歩んでいく姿を見守っていてください。必ず良き社会人になります。

私はこの階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。最後に、本当に本当に有難うございました。

平成２３年３月２２日

第６４回卒業生代表　梶原　裕太